

HIMALAYA

ヒマラヤ
No. 127

●特集 ヒマラヤの雪崩



1982 JUN.

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

昭和57年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会昭和57年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意志決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。5月15日まで必着するようお願いいたします)

記

1. 日時 昭和57年5月30日午後1時
2. 場所 東京都勤労福祉会館
(東京都中央区新富 1-13-14)

3. 議事

- (1) 議案第1号 昭和56年度事業報告について
- (2) 議案第2号 昭和56年度収支決算について
- (3) 議案第3号 昭和57年度事業計画について
- (4) 議案第4号 昭和57年度収支予算について
- (5) 議案第5号 役員および評議員の一部補充について
- (6) 議案第6号 会員の除名について

4. その他

総会終了後、同会場において講演会を行う予定であります。講師につきましては目下交渉中であり、あわせてご出席をくださるようお願いいたします。

表紙写真

ナウル・コーラの偵察へ向うべくマルジャンディ河を遡って行く道々、ヒマルチュリ(7,893m)の三つの頂きがその雄姿を変えながら大きく現われてきた。(菊地 薫)

ヒマラヤ No. 127

1. **ヒマラヤ放談** _____ 宮 原 巍
5. **ヒマラヤニュース** <地域ニュース・トピックス・インフォメーション>
8. **連載** ヒマラヤの雪崩
14. **特集** 未踏への誘い(6) _____ 内 田 勲
VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM(4) 東京徒歩山溪会
ヒマラヤ閑話② _____ 水 野 勉
24. 事務局日誌・寸感

ヒマラヤ放談

1959年の南極を皮切りにグリーンランド、そしてヒマラヤと地球の3極地を彷徨した宮原巍氏が、ヒマラヤの峻峰群を望むネパールの高地に「ホテル・エベレスト・ビュー」を建てて9年。このたび、そのユニークさから、スペイン観光出版業界の表彰を受けられた。マドリッドで表彰式のあと一時帰国中であった氏に、ネパールでの観光開発の苦労話など伺ってみました。



みや はら たかし
宮原 巍

● ヒマラヤのホテル建設

———このたび、「ホテル・エベレスト・ビュー」がそのユニークさから、スペイン観光出版業界の表彰を受けられたそうですがおめでとうございます。どういった表彰なのかお聞かせ下さい。

宮原 スペインというのはもともとヨーロッパの観光客が一杯いるところでして、そうしたことから観光国的なところがあるんですけど、そういったものの催し物の一つとして向うの観光業界誌がスペイン近辺の国のめばしい特徴のある会社などを毎年40~50社表彰しているんです。もう数年やってるらしいんですが……。スペイン国内の多数社あります。

今回アジアではインドネシア、バングラディッシュ、それとネパールではうちの会社でした。あとは、回りのリビアとか北歐、アメリカが2つ位あったですかね。ですから必ずしも一番最上級のホテルとかそういうことではなくて、まあ、多少ユニークでどちらかというと中堅どこ、そんなような……。

———ヒマラヤの高地にあるといったようなことですか。

宮原 まあ、うちの会社の場合はそのユニークさからのようでしたが……。

———「ホテル・エベレスト・ビュー」は営業開始されてから何年ぐらいになりますか。

宮原 ホテルの方は1970年に着工して1972年に出来ましたが、飛行場の方が1年遅れましたから実際に営業を開始したのは1973年の秋からです。

———現在、年間何人位のご利用客があるのでしょうか。

宮原 いまは年間1,300~1,400人位です。2,000人位の予約があるんですが、なにぶん足の方が確保されないものですから、ご存知のように6~7人乗りのピラタス・ターボ・ポーター機ですので、限られてしまうわけです。その上、日に2便位は飛んでももらいたいののに、3日に2便位しか飛ばないものですからなおさらです。今年などは、飛行機事故のためまだ一度も飛んでません。

———エベレストの山麓にホテルを建設しようと思いたった発端はなんですか。

宮原 私は専門が機械屋でしてね、最初1966年から1968年にかけてネパール政府との直接契約でネパール政府の通産省の中にある中小企業局に勤めてたんですが、2年間いろいろやってみてやはりこの国では「観光」しかないだろうという結論に達したんです。

クープの方へ何度か足を運んでいるうちに、カムジュンのヒラリー病院にいたDr. マッキンノン氏が、眺望が一番良い場所ということで勧めてくれたのが今のホテルの場所なんです。

———あのようなヒマラヤの山麓での建設工事ということで何かと苦労があったと思うんですが、いかがだったでしょうか。

宮原 そうですね。一つは輸送の問題がありました。当時はまだ飛行場がありませんでしたので、ラムサングから2,000人のポーターによるキャラバンを組んで建設資材を運搬しました。その後、ツイン・オッター機が就航してからも延べにして約4,000人を運びましたから、総工費のうち、1/3は運搬費用にかかりました。

それから寒冷高地ということで、工事期間の節約があるわけです。冬期は寒さのためセメントがうてなかったり、モンスーン期になると人夫の現地人が家業のために皆家に戻ってしまうなどで長びきました。

———建築スタッフは日本の方だったんですか。

宮原 建築設計は私の友人に頼みまして、大工さんは私の故郷の青木村（信州）から2人連れて行きました。あとは私が機械屋ということで、図面に慣れてましたから、現場監督として詰めました。

———費用の方も大変だったと思いますが……。

宮原 総工費で1億3千万円位かかったんですが、そのうちの6千万円位は自己資本とあの当時山へ行ってた登山仲間に株主となってもらってかき集めました。その他、飛行場を作るのに日本国政府から700~800万円の援助があったり、ネパール政府から援助があったりでスタートしました。

●無電1本で登山許可がOK！

———宮原さんがそもそもネパールの魅力にとり憑かれるようになったのはいつ頃からですか。

宮原 1962年に日大でムクト・ヒマールのホングデ（6,556m）へ遠征した時からですね。

あの時は、ムクト・ヒマールの最高峰であるホングデを陥落すべく意気込んで出かけていったのですが、あっけなく終ってしまいました。ツクチェからヒドン・バレーに入って2週間程で終って

しまったんです。

それでね、その後、ツクチェへ下ってからジョムソンに行ってカトマンズへ無電を入れてチューレン・ヒマールの許可をもらったんです。良い時代だったんですね。無電一本でこれからチューレン・ヒマールへ転進したいので許可くれといったら直ぐさまOKというのですから……。ただし、ロイヤリティはカトマンズに戻ってから支払うようにいわれましたが……。

それで1958年に川喜田さん達がトルボに入ったルートを辿ってムー・ラを越え、ムクト・コーラからバルブン・コーラに入ってカヤ・コーラへと進んで、チューレン・ヒマールの北面に回ったんです。登山の方はC・1を作るところまで進んだんですが、モンスーンの影響が現われ始めたため途中で断念してきたわけです。あの1962年の遠征はむしろこのチューレンへのキャラバンが楽しかったですね。

———その後、確か宮原さんはグリーンランドにも出かけられてますが、ヒマラヤの高峰登山だけでなくグリーンランドのような極地探険にも興味があったわけですか。

宮原 いや、あれはそうじゃないんです。1963年に山岳会（JAC）はエベレストの許可を取ってましてね、私もあんな巨峰に出かけられたらよいなあーと思いながら、私達の日大では1964年のチューレン・ヒマールの計画を進めていたんです。ところがあの登山禁止措置でしょ。それでグリーンランドとなったわけです。私も1959年に南極に行ったりして極地に関する文献を読んで興味がありましたからね。

———ああそうですか。その後のグリーンランド遠征などをみていて、日大の中にはヒマラヤと極地といった2つの派でもあるのかと思ってました。

宮原 いや、そういうことはないですね。グリーンランドに行った連中はグリーンランドの良さしか判らないからまたグリーンランドへ出かけてしまい、ヒマラヤへ行った連中はヒマラヤの良さしか判らないからまたヒマラヤへ出かけることになるのでしょう。

———そういえばこの間、昨秋出かけられたヒ

マルチュリ（日大さんの）の報告会に臨席させて戴いた時に、金坂一郎さんがこの連中はグリーンランドの連中だったが、よくあそこまで頑張ってくれたと感激されてたのを思い出しました。

●ネパールの観光開発

———1962年が最初の訪ネとしますと、もう20年にもなるわけですね。その間ネパールも随分と変られたと思いますでしょうか。

宮原 そうですね。昔はネパールを訪れる人が少なかったために訪ネした人の名前が、あの「ネパール王国探検記録」の本にも載るぐらいでしたが、今は1年間にネパールを訪れる外国人は約14万人位です。そのうち約1割の1万3千人位が日本人というように、まず外国観光客が増えたこと、新しい車が多くなったことですかね。

———外国からの観光客が増え、外国からの文化がどんどん浸透する中で、ネパールの人達の心の変化はいかがでしょうか。

宮原 あまり変わったとは感じられませんね。今は観光省は別個に独立しましたが、前は通産省の中にあっただけです。仕事を始めた頃、いろいろお世話になった役人は今では皆偉くなってしまって、なかなか会うのが難しくなったことぐらいですかね。

———ネパールのような立憲王主制の国で、宮原さんのように外国人が外国資本を持ち込んで事業をはじめるのは難しいのですか。

宮原 そんなことはないですよ。それよりもあいう国は諸外国からの援助があるでしょ。あれは国民をスポイルすることはあっても決して良くはないですね。もらえるものだという考えが浸みこんじゃうと、自分達で自立してやっていこうという気がなくなってしまうんですね。そうすると、お前は何故それほど苦労して一生懸命になって働くのか解らないということになるのです。

———現在、パタンの所に大きなホテルを建設中ですが、あれはいつ頃完成の予定なんですか。

宮原 一応1983年をメドにしております。あれは総工費12億円と、10年前のエベレスト・ビューの約10倍ですが、それだけに金策も大変です。しかし、あれはね、ネパールで外国からの民間投

資で建設する最初のホテルなんです。だから何がなんでも完成しないとやっぱり民間投資は駄目だということになってしまうので、頑張らなきゃなりません。

———今後の観光開発としてはどんな構想を持っておられますか。

宮原 矛盾したいいい方になりますがね、観光開発というと直ぐさまホテルを建設したりいろんなレジャー施設を完備して観光客を誘致するものだと考えますが、そういうことでは一時的には訪れる観光客も増えますが、長く続かないんですね。ネパールの場合なんかは、これからもどんどん“観光”による外貨依存は高くなると思いますので、息の長い観光開発というものを考えていなくちゃならないのですが、そうすると、やはりネパールならではの特色を生かした観光を売り出さなくてはならないと思いますね。

例えば、「ヒマラヤ」ですよ。あれは確かにネパールにあるものかも知れませんが、もともとは地球上のものなんですから、ああいう素晴らしい自然の景観は世界中の人々にもっともっと観てもらわなきゃだと思っんです。

私としては、現在年間に訪れる14万人の外国人観光客を40万人位までは増やせると思っんですよね。そうすればかなりの外貨が落ちますので、ネパール政府も観光外貨を重視して観光開発にもっと本腰を入れてくれるのではないかと思っんですが……。

———次に考えてるのは具体的にどんなところでしょうか。

宮原 ご存知のようにカトマンズではあまり観るところがないんですね。こまごまとあるのはありますが、せいぜい1日で観て終わってしまうぐらいなんで、今、カトマンズ盆地の北側にあるヒマラヤの展望地を考えてます。ここはね、ダウラギリも見える素晴らしいところなんです。

———カカニヤナガルコットのようなんですか。

宮原 いや、あんなもんじゃないですよ。

———日本へは1年の間にどのくらい帰ってこられるのですか。

宮原 以前は向うに行きっぱなしでしたが、最近はこの会社の東京事務所を開設したこともあっ

て1/3ぐらい帰ってくるようになりました。

——向うでの生活が長いといろんな外国の登山隊とお会いすることが多いかと思いますが、登山隊の様変わりというか、最近気づかれたようなことをお聞かせ下さい。

宮原 最近の仕事が忙しいこともあって登山隊と関わりを持つということはほとんどありませんね。それにね、私は間もなく50に手が届くんですよ。

確かに今でもそういう写真を見るとここにルートを拓いたらおもしろいんじゃないか、なんて目は動きますが、今は仕事が私にとって一つのエクスポレーションなんです。

——明日、またネパールへ帰られるというお忙しい中、本日はどうもありがとうございます。益々のご活躍をお祈りしております。

(インタビュー構成 尾形好雄)

日本カンチェンジェンガ学術調査研究事業の完了について

カンチェンジェンガ山域を中心として、昭和56年、57年の2か年間にわたって実施した標記の事業は、ほぼ所期の目的を達成して終了いたしました。

この事業の実施にあたっては、財団法人 車両競技公益資金記念財団(理事長 塚本敏夫殿)より多大の助成金の交付をいただき実施されたものであります。

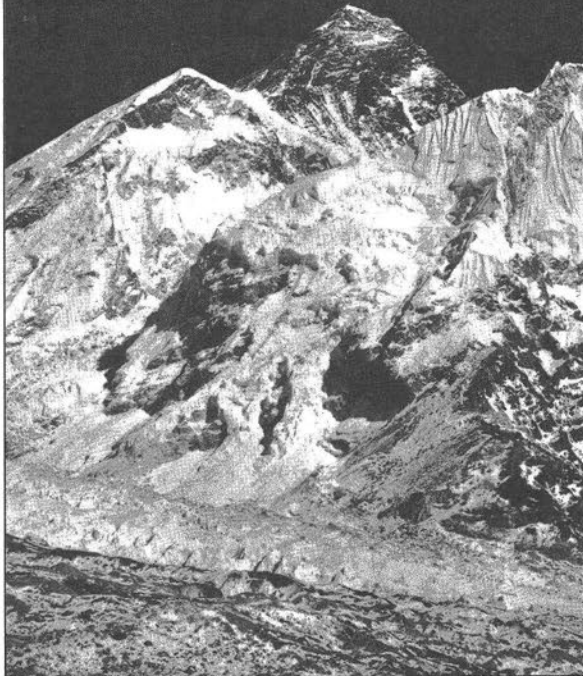
(財団法人 車両競技公益資金記念財団助成事業)

同財団は、車両競技公益金をもとに設立され、広く公益的事業の振興を援助されております。ここに記して同財団に深甚の謝意を表します。

なお、本事業の概要については逐次本会機関誌をもって各位に報告してきましたが、目下報告書発行を企画しておりますのでお待ち下さい。

昭和57年4月15日 日本ヒマラヤ協会
会長 柴田 金之助

ネパールへの旅は経験豊かな
代理店を選ぶことが第一です



■ヒマラヤ観光開発株はネパール政府観光局
指定インフォメーションセンター、ネパール
航空日本地区販売代理店に指定されてお
ります。

■ネパールへの個人旅行/トレッキング/パ
ッケージ・ツアー/トレッキングで登れる
18峰/登山の計画等、あらゆるご相談に経
験豊富なスタッフがおりますので、安心し
ておまかせください。

■ネパール国内ではトランス・ヒマラヤン・
ツアー社/ホテル・エベレスト・ビュー/
日本航空総代理店の業務を行なっており
ます。

ヒマラヤ観光開発株式会社

〒105 東京都港区新橋3丁目26番3号 会計ビル 5F
電話 03 (574) 9292~4

地域ニュース

《ネパール》

今秋より登山規則の改定か!?

先にブリクティ峰登山隊の先発としてカトマンズ入りしていた菊地薫隊長、今秋の登山隊からポーター賃金や保険料が値上がりしそうだと伝えてきた。ポーター賃金は30ルピー位になりそうだとのことである。

これまでの登山規則の改定などからすると、今春の登山隊が登山活動を終了した後、6月末頃に登山規則の改定が発表になりそうである。

《中国》

中国ヒマラヤ大盛況

登山解禁3年目を迎えた中国・ヒマラヤはネパールに劣らぬ人気を集め、ことしは82隊にのぼる外国の登山、トレッキング・パーティが入山する。このうち、本格的な登山を試みるのは、14か国30隊。国別では、日本がアメリカの8隊を上回る9パーティで最も多い。

今年中国・ヒマラヤを目指す日本隊は次の通りである。

(山名)	(標高)	(派遣団体)
チョゴリ(K ₂)	(8,611 m)	日本山岳協会
シシャパンマ	(8,012 m)	高山研究所
ポーロン・リ*	(7,292 m)	大分県山岳連盟
カンベンチン*	(7,281 m)	京大学士山岳会
ミニャコンカ	(7,555 m)	市川山岳会
アムネマチン	(6,282 m)	埼玉県山岳連盟
ボゴダ	(5,445 m)	東芝京浜
ボゴダ・無名峰	(4,613 m)	立正高校山岳部
ボゴダ2峰*	(5,287 m)	静岡・動霧山岳会

(*印は未踏峰)

上記のうち、すでに登山活動に入っていた京大学士山岳会隊は、早くも4月21日、22日の両日にわたって10名(うち1名は2度登頂)がカンベンチン東峰の登頂に成功している。

チョモランマの標高8848.13 m

中国・成都(四川省)解放軍部隊の測量・製図大隊はこのほど、世界最高峰チョモランマ(エベレスト)の高度を8,848.13 mと正確に測定した。

現在、一般の地図にも記載されているチョモランマの公式標高は8,848 mである。これは、インド測量局によって1954年に算出されたもので、ヒマラヤは地質的に若く、年々上昇しているといわれ、近年、8,848 mよりもっと高いのではないかと推測する西側の学者が多かったが、今回の解放軍の測量は、インド測量局の数値をわずか13 cm上回っただけで、今後の一般の地図の記載も8,848 mのままへ一向に差し支えがないことが判明したと云えよう。

この8,848.13 mという数字は、1975年に中国隊が登頂した際、金属性の高度観測用ポールを頂上に立て、技術者が頂上から7~12km離れた5,600 m~6,300 mの10か所の三角点で同時測量をした結果、同じ高度が算出されており、それを今回再確認した形で、もはや「8,848.13 m」は動かしがたい標高と云えそうだ。

(4月7日、朝日新聞)

トピックス

ネパールの医療向上へ 「早田基金」設立

肺がん研究の権威で、山男でもある東京医科大学外科早田義博教授(55)は、1975年にネパール・ヒマラヤのエベレスト山麓に高山医学研究所を設立して以降、高山病の研究、高山病患者の救済治療、地区住民の治療などに力を尽くしてきたが、このほどネパールと日本で「早田基金」を設立し、より強力な医療活動に乗り出すことになった。

ネパールは人口が約1,300万人だが、医師の数はわずか500人、看護婦も400人ほどで医療設備、医薬品も貧弱だ。

早田教授は昨年1月、カトマンズでタバ首相、医師らと懇談した席上、首相らからの希望もあって早田基金を設立し、ネパールの医師、看護婦を日本に留学させて養成する決意を固めた。

そしてこの2月末、カトマンズで開かれた日ネ

消化器病会議の席で、早田基金のネパール側での
 発会宣言をした。

早田基金の本部は東京医科大肺がん研究室に、
 支部をカトマンズのネパール医学協会におき、会
 員の寄金によって運営される。

当初の事業としては、ネパールから医師、看護
 婦数人ずつを招待し、東京医科大、国立近畿中央
 病院などで数か月間の研修を継続的に実施する考
 えだ。

(4月11日、朝日新聞)

ブリクティ隊壮行会開かれる

禁断の地、ダモダール・ヒマールのブリクティ
 峰へ向うHAJ登山隊の壮行会が、4月16日の夜赤
 坂の鮎勝で行なわれました。

当日は本隊出発前夜ということで、最後の最後
 まで慌ただしかった今回の登山隊にふさわしい
 (?) 壮行会となりました。

送る方も送られる方も難産だった登山隊が漸く
 出発の運びとなり皆それぞれに感慨深いものがあ
 ったので、時の経過と共に盛り上がりまし
 た。若い隊員達は決意も新たに二次会へと席を移
 して日本最後の夜を満喫しておりました。

なお、急な壮行会だったために登山隊派遣に際
 しましてお世話になった関係各位にはご連絡もせ
 ず大変失礼致しましたことをお詫びいたします。
 参会者25名。



ブリクティ隊出発する

すでに先発として菊地隊長と高橋・土谷隊員が
 現地入りしているブリクティ隊の本隊8名が4月
 17日AI-315便にて成田から元気に飛びたった。

本隊8名はバンコック経由で翌18日にカトマン
 ズ入りし、先発の3名と合流した後隊荷の通関等
 現地渉外も全てクリアーし、4月23日カトマンズ
 からポカラへ向った。

インフォメーション

都岳連の海外登山推薦が 無料となります

これまで東京都山岳連盟では直接加盟団体から
 の「海外登山のための推薦状交付申請」に対して
 5,000円の交付料を取っておりましたが、この程、
 4月6日以降申請のあった推薦状に関しては交付
 料は無料となります。

初級ネパール語会話講座 開講のお知らせ

初心者を対象とした初級ネパール語会話講座を
 下記の要領で開講致します。講師には青年海外協
 力隊、東京外国語大学でも教えていらしたスシュ
 マ・小俣さんに教えて頂くことになりました。初
 心者向けに会話を中心としたクラスですので、ネ
 パール語は初めての方でも結構です。受講希望者
 は事務局までご連絡下さい。

記

期 間 5月6日～7月29日 毎週木曜日

計13回 午後6時30分～8時

場 所 新宿区立三栄町社会教育会館

(四谷駅下車、徒歩約10分)

講 師 スシュマ・小俣

受講料 16,000円前納(ただし、会員は14,000円)

東京集会のお知らせ

4月の東京集会では今春出発したブリクティ登
 山隊の偵察行のスライドを觀賞しました。

5月の東京集会は下記の通りですので会員の皆
 さん、ご友人などお誘いの上是非お出かけ下さい。

日時 5月24日(月)午後7時～9時

場所 HAJルーム

講師 (接渉中)

新刊図書一覧

- 御禁示山・おとめ山 竹田助雄 創樹社 2月26日
- 植物と民俗 宇都宮貞子 岩崎美術社 3月3日
- 遙かなるシルクロード・西域(写真集) 廣谷正喜 平凡社 3月3日
- 高安犬物語 戸川幸夫 金の星社 3月5日
- ティンバーゲン動物行動学 ニコ・ティンバーゲン 平凡社 3月8日
- ムツゴロウのにつぼん大旅行 畑正憲 日本交通公社 3月10日
- ノウサギの生態 高橋喜平 朝日新聞 3月12日
- 石の微笑 井上清司 グラフィック社 3月12日
- 野の花2(フィールド百花) 大場達之 山と溪谷社 3月12日
- 昭和写真・全仕事 白川義員 朝日新聞 3月13日
- 昆虫ふしぎ読本 奥井一満 廣済堂 3月15日
- チベット放浪 藤原審也 朝日選書 3月17日
- 日本の野生動物 佐竹義輔他4名 平凡社 3月17日
- 動物千一夜 戸川幸夫 中央公論社 3月19日
- 奥多摩の花 山本二郎 講談社 3月23日
- チベット 多田等観 岩波(新書) 3月24日
- 熊と猟師 柳田佳久 大陸書房 3月25日
- 続鳥海山日記 佐藤康 秋田書房 3月27日
- 西域列伝・シルクロードの山と人 金子民雄

岳書房 3月28日

- 早春の花 飯田龍太 小学館 3月31日
- 剣・立山連峰 山と溪谷社 3月31日
- ユーラシアシルクロード③・女王の隊商都市 加藤久晴・前島信次 日本テレビ 4月1日
- 白き聖地・ヒマラヤ 山田圭一・薬師義美 講談社 4月2日
- 富嶽歴史 伏見功 現代旅行研究所 4月6日
- 絵本野山草 橋 保国 八坂書房 4月8日
- 山は晴天 小西政継 中央公論社 4月9日
- フィールド百花・山の花① 山と溪谷社 4月12日
- 気界散策 根本順吉 日本エディタースクール出版 4月16日
- バルンツェ 厳冬期登頂報告1980~'81 北大山岳部北大山の会 4月16日
- 東部ヒマラヤ紀行報告'80~'81 細田浩 4月17日
- 新潟の山旅 森谷周野 新鉄山岳連盟 4月17日
- 登山のルネサンス 高所研究所編 山と溪谷社 4月19日
- 富士山の植物 井上浩 小学館 4月21日
- 写真集・世界の秀峰 風見武秀 東京新聞出版局

「チョモランマ峰図」入荷のご案内

中国語の地名がついている一枚物が入荷しております。〔蘭州科学院氷川凍土砂漠研究所刊、定価2,500円、連絡(株)東方書店 TEL 03-294-1001〕

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)の各地域の社会情勢・現地事情(入山事情)の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅、etc.....。ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。

★投稿は会員、非常会員を問いません。採用分には全国共通図書券をさしあげます。

★送り先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル506

日本ヒマラヤ協会

ヒマラヤの雪崩

HAJ 高所登山委員会

3月の連休にハケ岳で12名の尊い命が奪われるという痛ましい大規模な雪崩遭難事故が起った。雪崩遭難事故の場合、ひとたび事故が起ると被害が大きく、大量死亡となるのが特徴である。

これは、国内の山に限らずヒマラヤにおいてもいえることで、最近のヒマラヤでの遭難事故の統計（註1）を見ると、雪崩によるヒマラヤでの遭難事故は、実に全体の6割近くも占めており、しかも雪崩遭難の場合その大半が大量死亡となっているのである。

確かに我々山へ行く者にとって雪崩は国内外の山にかかわらず積雪登山の最大の脅威でありながら、その危険の予知と予防の問題となると難しい厄介なものであるために大方の登山者は手を束ねているのが現状である。ヒマラヤの高峰という大自然に立ち向うからには、己れを知ることは勿論のことながら対相手（山）を知ることも重要なことであろう。雪崩の問題を一挙に解決することは不可能にしても、解決への糸口は幾つかあるのではなからうか。ここでは、昨秋のナンダ・カート遭難事故を反省しながら、ヒマラヤの「雪崩」について検討してみた。

（註1 日本人のヒマラヤ登山と死亡事故について—1970年から10年間—山森欣一 年報ヒマラヤ 1980）

ヒマラヤの雪崩遭難事故

1970年から1981年までの12年間に6,000m以上の高峰に向った日本人は、408隊で3,476名にものぼり、このうち57隊が遭難事故に遭遇し109名もの人が亡くなっている。

これら驚くべき数の遭難事故を原因別に書き表わしたのが図1である。この図を見るとヒマラヤの遭難事故における雪崩遭難がいかに多いかが窺える。即ち、これまでに61名が雪崩によって死亡しており、それは遭難事故の半分以上も占めているのである（実際死亡事故につながらない雪崩事故はもっと多いと思われる）。

また、表1（12～13頁参照）はここ12年間に日本隊がヒマラヤで雪崩に遭遇した登山隊の一覧表である。表中の死亡者数欄を見ると7人、6人、5

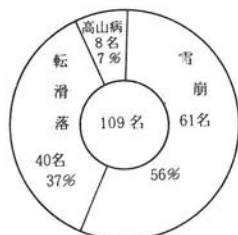


図1 原因別死亡状況

人など大きな数字が眼につくわけだが、雪崩遭難の場合、大半が大量死亡につながるということも見逃せない特徴の一つである。

ヒマラヤの雪崩

雪崩の分類はその目的によっていろんな分類法がある。1973年の国際分類では、発生の原因（4種）、発生の際の形態（5種）、滑り面の位置（6種）、発生時の雪の水分（3種）、通過区の際の形態（3種）、運動型（3種）、デブリの粗さ（5種）、堆積した雪の水分（3種）、堆積区内の混入物（6種）等で分類され、これら9要素の組み合わせは、単純に計算すると291,600通りあることとなる（「雪崩の世界」新田隆三著より）。このように30万種にも及ぶ雪崩の中から自分達が遭遇した雪崩を見つけることは到底不可能に近いことである。表1では体験者の報告等からだいたい傾向を見る意味で、次の4種類に分類してみた。

乾燥雪崩 積雪が増加することによって自然発生する表層雪崩。

雪板雪崩 風に吹きころがされて集まった風成雪が堅くなって生じた雪板が割れたり崩れたりして斜面を滑り落ちたもの。

ブロック雪崩 懸垂氷河やセラックの崩壊によって氷塊が落下したものの。

爆風雪崩 乾燥雪崩などに伴って生じる軽い雪粒と空気の混合体の流れによる衝撃で吹き飛ばされたもの。

表1の分類で見ると(不明なものも多いが)やはり何日か悪天が続いた後、大量に降り積った新雪による乾燥雪崩にやられているのが多い。

これらの事例を見ると、雪崩に対する「急斜面においては降雪が終ってもせめて1日くらいは待たなければならない」といった誰もが認識しているようなルールが、迫り来る雪崩の恐怖感から守られず行動を起して雪崩に流されたり、異状な降雪などによって、ある程度安全を見極めて設営したであろうと思われるテントにいながら雪崩によって埋没してしまったりしているのが見られる。

たしかに乏しい資料を元にして立案する国内の計画段階では、ルートの選定やキャンプの展開などを考えるのにそのルートなりキャンプ地がどれほど雪崩の危険率が高いかを想像することは容易なことではないであろう。しかし、ここで今一度考えてもらいたいことは、困難性と危険性の違いをよく認識してもらいたいということである。

急峻な岩稜や岩壁は、確かに技術的な困難性があるかも知れないが、かといって易しいルートへエスケープしようと冗長で広大な雪稜や雪壁へ転進すれば、技術的な困難性は回避できても、ホワイト・アウトや雪崩など自然界の危険性を背負うことになるのである。そして、この自然界のリスクは時として人間の予知能力をはるかに越えた悲劇をもたらすのである。

雪崩が来るのがわかっていながら、そのルートをどうしても登りたい(または、登らざるを得ない)というのは、登山行為からして己む得ないことなのであろうか。

1978年に、その執念の山を落さんがために再度同じ山の同じルートへ向って明暗を分けた二つの登山隊がある。

一つは、静岡登攀クラブのバインダーブラックで、この会は1974年に同じバインダーブラックの南壁に挑みながら雪崩によって敗退を強いられており、再度、'78年に赴いた時は、徹底した雪崩対

策によって4年前の雪辱を果し、南壁を完登した。彼らの雪崩対策としては、①登山期間を十分にとり山(ルート)を観察する。このため、前回より出発を1か月早くした。この結果として、日数的に余裕があったため、シーズン初めの雪崩が激しい時には行動せずに雪崩の落ち具合を観察できた。気づいたこととして(イ)死角からの雪崩に注意。(ロ)雪崩の観察により、山のスケールが実感として判った。②荷物は最少限にして、危険個所の通過を少なくする。岩壁基部への荷上げは約350kg。③早朝の出発。さらに、往路はよいとしても、復路は翌朝にまわす1日行程を2日行程とした、と述べられている。彼らは、当たり前前の対策としているが、その当たり前前のことがなかなか守られないのが多いのである。

もう1隊は、P29のツラギの会であるが、この隊も隊の名称は変っているが、同じく'74年に南西壁から挑みながら雪崩によって敗退させられた登山隊である。'78に再度同じルートに向うに当り、彼らは前回の経験から登山時期をプレからポストモンスーンに替え、さらに危険個所の通過をスピーディかつ効率良く行おうとウインチによる荷上げを考えて出かけていった。しかし、そのウインチをセッティング中に予想もしない1,000m余り垂直上部の懸垂氷河が崩壊して直撃し、その爆風によって3名が死亡する痛ましい事故に見舞われている。誠に不運としかいいようがない。

この後者が被害にあった雪崩の爆風というものは雪崩対策において非常に重要なものである。

普通、我々が雪崩による遭難事故というと、雪崩によって流されたり埋没してしまうことを考えがちであるが、雪崩によって甚大な被害をもたらすのは、実はこの爆風雪崩なのである。

エア・ウェーブ(註2)とも呼ばれるこの軽い雪粒と空気の混合体の流れは、日本でも泡とかホウラと呼ばれ、各地に大きな被害をもたらしている。

吉村昭の小説「光熱隧道」にも出てくる黒部志合谷の宿舎が600mも離れた対岸の奥鐘西壁に叩きつけられたり、阿曾原の宿舎が忽然と消失してしまったのもこの仕業である。

1978年にユトマル・サールで5名が死亡した遭難事故もこの爆風雪崩であった。

C・1にいた5名が遭難したのだが、消息が途絶えた2日後に急行した救助隊が目にしたものは、地形は元のままであり、テント場の下流には雪崩のデブリもなく雪崩に襲われた形跡など無い状態でC・1が跡形も無くなっていたのである。ただ、テント場の上部50m程の所には大きなデブリが押寄せてきていたという。

結局、テント場より30m程下方のクレバス内で遺体やテントの残がいが見つかったのである。

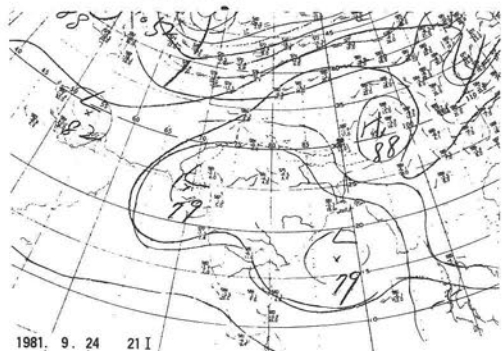
この事例から考えるに、テント地を設定する際、古いデブリの痕跡からデブリの最長到達距離だけを見て、ここまでは来ないだろうなどと判断するのは早計といえよう。

また、これは爆風雪崩に限らないことだが、雪崩に対する防禦策として小さな山やクレバスを楯として頼りにしている報告がよくなされているがこれらの楯は余役に立たないことも知るべきであろう。

エア・ウェーブが爆発的な力を発揮し易い場所の一つとして、ヒマラヤやアルプスなどの広いU字谷が上げられている。これは壁の急峻な斜面を落ちてきたエア・ウェーブが谷底に来て急にゆるやかになるために爆発するといわれており、前述したユトマル・サールやエベレストA・BCのヌプツェ側から来る雪崩などがその実例であろう。(註2 新田隆三著「雪崩の世界」)

降水量と異常気象

昨今は、ヒマラヤも冬期登山へと突入し、より厳しい自然条件下での登山を实践しようと苛酷な闘いが展開されている。こうした中でいささか時代に逆行するような考察であるが、一昔前までは、モンスーンの影響を受けるネパールやガールワ



ル・ヒマラヤでは登山時期をプレモンスーンにするかポストモンスーンにするかが真剣に検討されてきた(最近では、ヒマラヤへの登山隊数急増のため目標とする山が空いているどうかで時期を決めざるを得ないようである)。

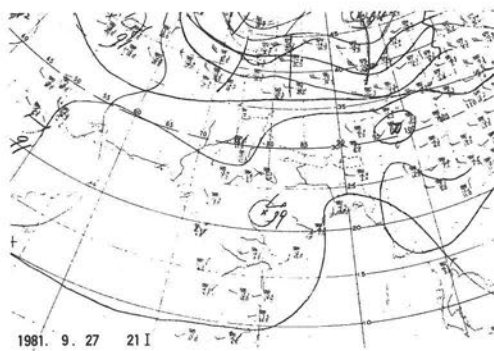
表2は、1970年から81年までの12年間にネパール・ヒマラヤへ出かけた日本隊を登山時期別に分けて雪崩事故を比較したものである。これで見ると、プレの登山隊数は93隊とポストの72隊を大きく引き離しているものの、雪崩事故の件数は逆転してポストの方が13隊27名と多く、18%もの割合で雪崩に遭遇しているのである。

ネパール・ヒマラヤの場合、モンスーン中に大量の雪がもたらされるのは周知の通りである。日本の統計を見ても積雪量の多い年には雪崩事故も多くなっており、ヒマラヤでもこれが通用しそうとは考えられないであろうか。

表2 ネパール・ヒマラヤにおける日本登山隊の雪崩事故時期別比較(1970年～1981年)

年	プレ	ナダレ		ポスト	ナダレ	
		件数	死亡者数		件数	死亡者数
1970	10	0	0	3	0	0
1971	11	0	0	5	2	7 ^③
1972	4	0	0	6	0	0
1973	8	1	5 ^①	5	2	6 ^①
1974	9	2	0	3	0	0
1975	9	3	5 ^③	4	0	0
1976	3	0	0	3	0	0
1977	5	2	1	2	0	0
1978	7	1	0	11	4	6
1979	7	0	0	8	2	3
1980	8	0	0	7	1	3
1981	12	1	0	15	2	2
計	93	10	11	72	13	27

○印数字は現地人死亡者数



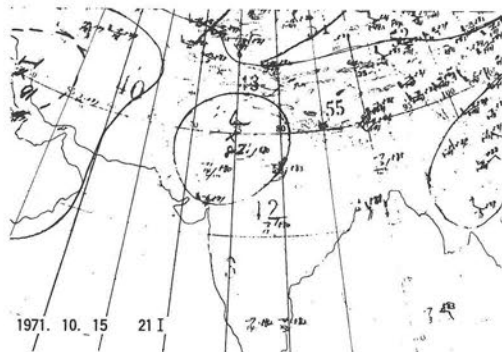
ネパール・ヒマラヤのプレモンスーンやポストモンスーン期の天候の概略は古くから知られているが、それを普遍的な原則であるかのように受け取り、それにこだわり過ぎると時として手痛い打撃を蒙る。

昨年の9月末にヒマラヤで相次いだ雪崩遭難事故などもその一つであろう。

9月11日まで、典型的な悪天が続いた後、一転して12日から26日までの2週間にわたって好天が続いた。このため早いモンスーン明けと錯覚された登山隊が多かったようである。早くにB・C入りして登山活動に入っていた登山隊は、この好天期間で順調にルートが延び、早くもアタック態勢に入った隊もあった。このようにルートが延びきったところで9月27日から悪天が始り、3日間にわたって異常降雪がヒマラヤの各地にもたらされた。そしてこの異常降雪は乾燥雪崩のセオリー通りとなって3隊を襲い、わずか2日の間に12名もの命を飲みこんでしまったのである。

一説によるとアラビア海に発達した低気圧がインド西部からネパールにかけて縦断したとも伝えられているが、当時の北半球の500 mb 等圧面天気図を見ても9月24日にベンガル湾にサイクロンが発生しており、このなごりモンスーンというべきサイクロンによる悪天と見るべきでないだろうかと思うが、この辺の解析は専門家に委ねることにしよう。

この500 mb 等圧面天気図とは、丁度、標高5,500 m位の高さのところの天気図である。従ってこの高層天気図に現われる風の流れ、寒気の状態は直接5,500 m級の山岳における風や寒さの程度、天気状態のよき指標となるのであるが、生憎とヒマラヤ山中ではゾンデを上げてないので一番



知りたい地域のデータが無いのが残念である。

もう一件、ポストモンスーン期に起った大量雪崩遭難を見てみることにしよう。1971年10月16日、ガンガプルナの登頂を果たした長野山岳協会隊は、登頂後から始った豪雪に襲われC・2が雪崩で埋められ6名が死亡するという惨劇に見舞われた。これも、当時の500 mb 等圧面天気図を見るとヒマラヤ一帯は深い気圧の谷におおわれており、この気圧の谷に南からの暖かい空気が流れこんで豪雪となったのであろう。

いずれにしろ、この2件の遭難時には平地でも大雨に見舞われ、インド、ネパールなどでは大洪水による大きな被害が出ている。

こうした大災害が起こるたびに約40年ぶりとか70年ぶりの異常気象であったといわれるが、現にこの11年の間に気象要因は違うかも知れないが2回も大きな事故が起きていることを直視すれば、我々登山者としては、その不運をただ嘆くよりも、最初からこういう事故は起りうることを念頭に置いて、豪雪対策としてルートなりキャンプ展開、人員配置を考えるべきではないだろうか。

おわりに

ナンダ・カートで7名の岳友を失ってからはや7か月が過ぎ去り、漸く平静さをとり戻すようになった今お彼らの行方に想いを絶ち切ることが出来ず、彼らの事故原因を追求していくうちに余りにも数多い雪崩遭難事故にぶつかり愕然とした。

紙面の都合上、割愛する部分が多く中途半端な考察となってしまったが、もうこれ以上、同じような悲劇を繰り返さないためにも一つの警鐘としてヒマラヤの雪崩遭難事故例を掲載した次第である。
(文責 尾形好雄)

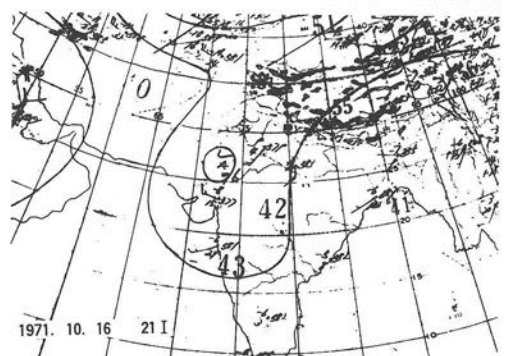


表1 ヒマラヤ登山（6,000 m以上の山）における日本隊の雪崩事故（1970～1981年）

No	山名	隊名	事故発生年月日	時刻	パーティ人数	雪崩遭遇者	死亡者	負傷者	分類	内容
《ネパール》										
1	ダウラギリ V (7,618 m)	九州大学山岳会	71.10.6	11:40	10	4	1		乾燥雪崩	○内数字は現地人死亡・負傷者数 C・2 (5,900 m) にいた隊員2名、シェルバ2名の計4名はC・2上部右方のルンゼにルート1工作中、上部で雪崩が発生、5,950 m地点から600 m流されて1名死亡。
2	ガンガプナル (7,454 m)	長野県山岳協会	71.10.16	夜間	10	6	③ 6		乾燥雪崩	10/15午後から天候が崩れ、翌日の夜間にC・2 (5,900 m) が大雪崩に襲われ、隊員3名とシェルバ3名の計6名死亡。
3	アンナプルナ I (8,091 m)	JAC信濃支部	73.5.18	11:15 14:40	11	5 7	3 ① 2		乾燥雪崩	C・4から指令を無視して降雪中を行動開始して雪崩に遭遇、5/16から降雪が始まり、避難物のないC・3が危険にさらされたために撤退する途中で雪崩に襲われる。
4	アタヒウンチュリ (7,246 m)	四日市山岳協会	73.10.12	夜間	8	3	① 3			C・5 (6,300 m) 入りした3名がキャンプごと雪崩に襲われて埋没。雪崩の発生原因として当地を襲った地震の影響かともいわれている。
5	キンカ・リ (6,979 m)	瀬戸水南山岳会	73.10.8	?	5		3			キンカ・リの偵察中、5,800 m付近にて雪崩に襲われ3名死亡。
6	ジヌ (7,710 m)	成城大学岳士鉄人会	74.5.8	23:00	9	4	2		乾燥雪崩	C・5 (6,900 m) で就寝中テントごと80 m流されセカンド・サウダーは歩行不能となり装備も流失する。
7	アンナプルナ S (7,200 m)	灌漑山の会	74.4.4	夜間	8		②		爆風雪崩	B・C (4,200 m) が大雪崩に襲われ全壊する。L・Oとシェルバ1名が爆風でテントごと吹き飛ばされて負傷。装備・医薬品を紛失する。
8	エベレスト (8,848 m)	日本女子登攀クラブ	75.5.4	夜間	15				プロック雪崩	ヌアツェ側からのプロック雪崩にA・BC (6,400 m) が襲われ、隊員テント2張、'シエ'ルパテント1張が埋没する。
9	ダウラギリ I (8,167 m)	東京都山岳連盟	75.3.25	夜間	17		③ 5		乾燥雪崩	3/23から始まった降雪は3日間続き、25日の深夜C・1 (4,500 m) が雪崩に襲われ隊員2名、シェルバ3名が死亡する。
10	P 29 (7,835 m)	兵庫山岳連盟	75.4.30	20:00	13					頂上氷壁の基部に設けたC・4 (6,850 m) が雪崩のため埋没し、頂上攻撃用資材の大半を失なう。
11	ヒマラチマリ (7,883 m)	明治大学山岳会	77.5.12	17:30	14		1		プロック雪崩	頂上稜線から東壁を下降中、7,500 mの地点で雪庇崩壊による氷塊を頭を受けて死亡。
12	チューレンヒマール (7,371 m)	川崎山岳会	77.4.21		10	3	2			C・4 予定地へ荷上げの途中に6,900 m付近で雪崩に会い2名が重傷。
13	ダウラギリ I (8,167 m)	群馬山岳連盟	78.9.23		18		3			C・4 (6,450 m) からルート1工作に向ったまま3 隊員が消息を絶つ。6,500 mの雪庇の張り出した鋭い尾根から南壁側へ雪崩が来た。
14	P 29 (7,835 m)	ツラギの会	78.9.14		10	6	3		爆風雪崩	C・2 (5,240 m) で荷上げ用ワイヤー設置工作中、西壁と南西壁を分ける1,000 m余りの垂直上部の懸垂氷河が崩壊して直撃する。
15	ランタン・リルン (7,245 m)	大阪府大山岳会	78.10.12	10:30	9	3	1		プロック雪崩	C・2へのルート1工作中、ルンゼ内でプロック雪崩の直撃を受け、1名右腕骨折する。
16	アメリ (7,145 m)	広島修道大学	78.5.2	22:00	6				乾燥雪崩	C・4 (6,800 m) を建設してキャンプ入りした3名が夜の10時に雪崩に襲われ、テントを潰されたが大事に至らず。
17	ツクチュ・ピーク (6,920 m)	長井山岳会	78.9.20	13:30	6			①	乾燥雪崩	2日間の気象停滞のあとC・1へ荷上げに向った3パーティ9名のうち、先頭を登っていたシェルバが雪崩にまきこまれて200 m流される。
18	ニルギリ C (6,940 m)	姫路岳友会	79.10.21		11					大雪崩により5,200 mのC・2が増減。
19	パタル・ヒウンチュリ (6,337 m)	しゃくなげ同人	79.10.9		7		① 3			B・C手前の4,000 m地点で隊員2名、ポーター1名が埋まる。

20	ガネツシユ (7,130 m)	愛知=ネバール合同隊	80.10.9		② 14	3		5,600 mの地点でルート工作中3隊員が雪崩に遭遇して行方不明
21	カンチエンジュンガ (8,598 m)	HA J	81.5.3	8:30	22	①		A・B・C(7,300 m)からC・4への荷上げに向ったシエルバがA・B・Cの直ぐ上で表層雪崩にまきこまれて負傷する。
22	ガインガブ (7,454 m)	明治大鞍台山岳部	81.9.29	6:15 ~8:00	6	2		異常降雪のためC・2(6,750 m)で気象停帯していた2隊員がテントごと埋没。
23	アインガブ (8,091 m)	イエティ同人	81.9.27		12			C・2(5,500 m)のテントが峭壁に起った大雪崩の爆風で吹き飛ばされ、2隊員が新雪に埋められ脳震とうを起す。

《インド》

1	シツクル・ムーン (6,574 m)	日印合同 自衛隊山岳友の会	73.10.12		⑦ 14	3		頂上直下150 mで3名が雪板雪崩に巻き込まれて負傷。
2	バンワリ・ドワール (6,663 m)	佐久アッセントクラブ	79.5.16		5			プリア氷河に設けたC・2が大雪山崩に潰され荷上げしておいた装備を紛失。
3	バンワリ・ドワール (6,663 m)	丸山同人	80.1.29		9	3	1	C・1(4,600 m)からB・C(3,700 m)に向けて下山中の3隊員が雪崩に流されて1隊員が行方不明となる。
4	ホワイトセール (6,440 m)	一ツ橋大学山岳部	81.9.9 ~10		3			10/10.3名で5,700 m地点より頂上をねらうことになっていたが、9日~10日の悪天候の中で消息を絶つ。雪崩に遭遇したのではと考えられる。
5	ジヤホーン (6,632 m)	山岳同人タンネ	81.9.23	9:10	5	① 3	2	午前2:30にC・2(5,530 m)を出発した隊員4名とハイ・ポーター2名は、前日の最高到達点を越えてさらに登高を続けている途中、トップの足元より雪崩が発生。
6	ナンダカート (6,611 m)	HA J	81.9.27	夜間	8	7		C・3(6,000 m)の7名が、9/27,18時の交信を最後に消息を絶つ。後日C・3附近が大規模なデブリに覆われているのが発見された。

《バキスタン・アフガニスタン》

1	バインダブトラック (7,285 m)	静岡登攀クラブ	74.7.23	18:37	8		2	C・1がブロック雪崩の爆風で60mも下方へ吹き飛ばされ2名が負傷する。	
2	バツラ (7,785 m)	都庁山岳会	77.7.9		12	9	1	C・3からC・4への荷上げに堅雪の斜面をユマールで登り、大トラバースにさしかかったさい突然ブロック雪崩に襲われる。	
3	ティリッチ・ミール (7,708 m)	福岡登高会	78.6.28		10	2	1	C・1~C・2の約70度の雪壁をトラバースしながら固定ロープを張っていた2名が雪崩に襲われ、1名が負傷する。	
4	ユトマル・サール (7,330 m)	東京志岳会	78.7.23		9	② 5		C・1(5,150 m)が大雪山崩の爆風に襲われ、C・1にいた3隊員及びポーター2名の全員が死亡する。	
5	ラトツク (7,145 m)	京都カラコルムクラブ	79.6.21	夕方	10			クローワールの約50m上方から発生した雪崩がC・1(5,500 m)を押し流す。	
6	ゴーカー・サール (6,249 m)	白河山岳会	79.7.28	昼すぎ	15	6	6	6隊員がC・2で休養中、大量の雪と氷のブロックに襲われ埋没、全員死亡。	
7	ガッシュンブルムIV (7,980 m)	関西クライマーズクラブ	81.7.7		5	5	3	1	6,150 m附近のセラックが崩壊してルート作業員を直撃し、3名死亡、1名骨折。

《その他》

1	レニ (7,134 m)	新潟大学山岳会	74.7.23		14	9		C・2からC・1への下降中、4,600 m附近で雪崩に襲われ食糧等を紛失。当地を襲ったマグニチュード7の大地震による影響か。
2	チャモラン (8,848 m)	日本山岳会	80.5.2	17:30	26 (41)		1	C・4からC・5へ向っていた2次アタック隊員2名は、ホーンバイン・クローワールの7,900 m附近で雪崩に襲われ、1名死亡。

バツラー山群

内田 勲

バツラー山群は西のイシコーマン谷を区切りにしてコズサルからクッサール、そしてバツラー氷河の南をへてフンザ河の谷に至る範囲のことと一般に言われているが、今回は著者自身が歩いたククアイ氷河、トルタル氷河の周辺について述べたいと思う。不勉強な点がありましたらお許し下さい。

ククアイ氷河を行く

この氷河を遡ると、最初にサトマロ氷河と出会う。ククアイ氷河右岸からほぼ西へ向ってまっすぐに延びている。その線上にイシコーマン谷との分水嶺上にある プリアンサル (6,293 m) につき上げている。1975年8月に西面のイシコーマン谷、バドスワート氷河から京都カラコルムクラブによって16日間で初登されているが、それ以外からは登られていない。

サトマロ氷河については、1959年8月にドイツ・パキスタン合同隊が左岸上部にある5,900 m 峰に登っている。また1961年9月に日本・パキスタン合同隊が5,800 mに登っている。そして1975年都庁の探査隊が7月～8月にかけて、バドスワート氷河を越そうと試みたが、4,900 m付近まで達し時間切れで引き返している。

急峻な岩壁は少なく、白い兔でもうづくまっているような雪だらけといった山容で、最初から最後までラッセルとクレバスに悩まされることを覚悟すれば、サトマロ氷河からの登頂も十分可能だろう。ただ時期が遅ければ、取付あたりの氷塔群に追い返されそうな気がする。

最奥の村バールからブイブシュコットを経て、2～3日でベースキャンプを作れそうなのも魅力である。

サトマロ氷河の次に出会うのが、バリオウダ

クシュ氷河(注)だ。この出合の右岸にバリオウダロクシュという大きな緑地と、渇水期にも澄んだ水を満々と貯えた池があり、思わず停滞したくなる所だ。

このバリオウダロクシュ氷河は1日ほど奥に詰めて行くと、プリアンサルから連なるイシコーマン谷との分水嶺の尾根に行く手を遮られてしまう。

宮森地図によれば、6,872 m 峰の南西面まで続いている筈だが、この氷河はるか手前で終わっていた。

5,856 m を中心としたピークは、いずれも正面から取付くのは難しく、南東に延びている尾根か



△サンヨウダロクシュからの6,885 m 峰

ら登った方が得策だと思う。どのピークも顕著なピークとは言い難く、登攀意欲には欠けるところがある。

1956年7月にニュージーランド隊が、このあたりの約5,500m峰に登頂したらしいが、写真を見ていないのでどのピークなのか全く解らない。そのつもりで見ると付近のピークが全部5,500mに見えてしまう。

次に出合うのがサンヨードロクシュ氷河(注)だ。この氷河も出合のところにサンヨードロクシュという小さな緑地がある。

このあたりから平年だと入山時期まで積雪が残っていて、ポーターとのトラブルが起きそうなところだ。

このサンヨードロクシュあたりから6,872m峰が見えてくる。6,885m峰はバリョウダロクシュ付近から見えます。

このふたつの峻峰は、登山申請の際にその順位を常に2番手以降に指名されつづけた運命にある。

いずれも高度不足が原因であろうが、山容と難易度の面から考えても決して他とひけをとるものではないと思う。しかしながら結論から言えば、広大なカラコルム山群の中には、この程度の山は

幾らでもあるということなのか。

このような状況下にあるとはいえ、入山が容易であるわりにはまだ未登のままに残っている。現地の人達はこのふたつの山のことを6,885m峰はコイツチイッシュ(美しく高い山)と呼び、6,872m峰はコシートルチイッシュ(獵師がアイベックスを沢山獲った山)と呼んでいる。

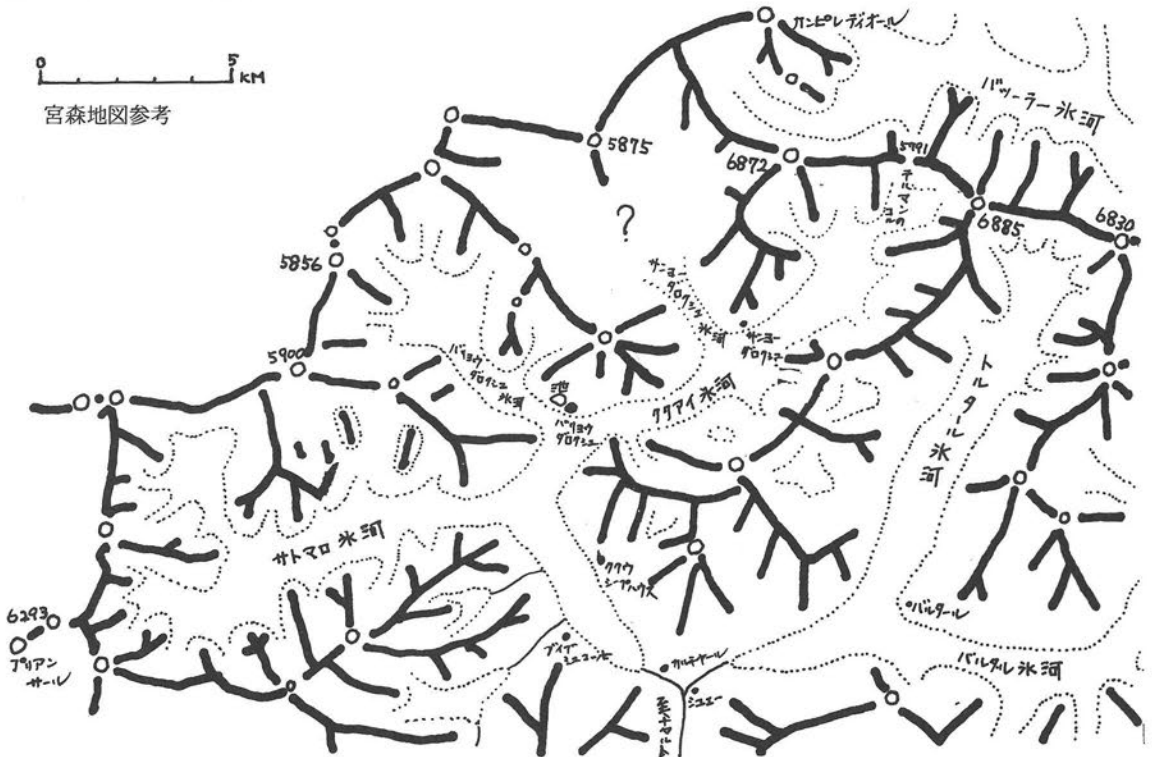
サンヨードロクシュ氷河は、バリョウダロクシュ氷河と比べて出合付近は狭く急だ。

5,875m峰の裏側はカランバル氷河の領域になる。この氷河を奥へ遡れば6,872m峰の南西面に行きつくはずだ。

6,872m峰は、カランバル氷河から見ると鋭い針峰になっているが、南側から見るとさほど急な斜度はないように思うので、バツラ氷河と分ける尾根伝いに登るルートが考えられる。ただレサンヨードロクシュ氷河の奥はまったく不明で、6,872m峰の下部の状態も予想がつかない。

ククアイ氷河はサンヨードロクシュから1日の行程で、4,000mを越すが、このあたりから氷河は急に斜度を増し、東方向に緩やかに曲ってティルマンのゴルに続いている。

ククアイ氷河の4,000m付近は左岸の崩壊が激



しく、6,885 m峰の真下にいながら岩壁からの落石が多く、登るルートはとてもありそうにない。

6,872 m峰は、頂上よりやや東寄りから急な尾根がアルファベットのIの字に落ち込んでいるが、稜線近くはさらに急な雪壁となっている。取付までは氷塔群を抜けなければならないが、ククアイ氷河からは最も容易に利用できるルートで、初登を目指すならまずこのルートしかないだろう。

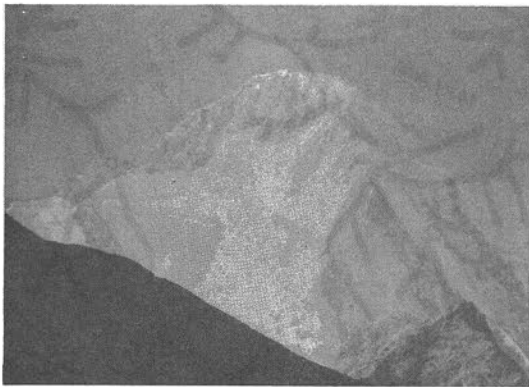
6,872 m峰は南北方向に薄く東西方面に厚い山で、バツラ氷河側はそぎ落したように切れ落ちている。

ティルマンのコル(5,791 m)に達するには、さらに急になったセラックス帯を抜けて、奥の院を思わせる広々とした雪原に出なければならない。コルへ出るには登攀具なしではとても無理だ。ククアイ氷河の源頭を包み込むように、雪壁と岩壁が障壁となってとり囲んでいる。

1948年に初めて、H. W. ティルマンがこのコルに立って、バツラ氷河に出ようと試みたが断念している。

バツラ氷河側は急で崩壊が激しく、休みなく落石の音が響いていた。眼下に流れるバツラ氷河に降りてみようという気は起きてこない。

ククアイ氷河から6,885 m峰へ登るなら、どうしてもティルマンのコル直下の雪原まで登ってこなければ無理だろう。雪原入口付近から右岸に落ちている小さな尾根に取付き、白い肩に出て頂上を目指すか、あるいは最底鞍部まで行き右寄りの雪壁に取付く方法があるが、こちらは落石が多く、どちらかと言えば前者の方が初登ルートとして無難といえる。いずれにしても奥の院の雪原に



△サンヨーダロクシュからの6,872 m峰

立ち入る以上、雪崩の危険は尽きない。

6,885 m峰は南北方向に厚く、東西方向に薄い山容をしている。

6,872 m峰、6,885 m峰とも、最奥の村パールから約5日間でベースキャンプ地点まで到達できる距離にある。

トルタル氷河を行く

トルタル氷河は、バルダール氷河から別れて、6,885 m峰と6,830 m峰の直下で終わっている。

この氷河は地図上の距離よりも実際はもっと短いような気がする。バルタルの大きな緑地にある羊小屋から、1日強もあればこの氷河の終了地点まで行ってしまおう。

トルタル側から6,885 m峰を登るには、南西稜を利用する他にはないと思う。正面の岩壁は複雑で雪崩も起りやすく少し無理だ。6,830 m峰との鞍部などはとても登ろうという気にはなれない。

スラブ状の岩壁を登って鋭く切れた雪のない稜線に出て6,000 mラインあたりを越すと、あとは急な雪稜が頂上まで続いている。

トルタル側から見ると、これが6,885 m峰かと間違えそうな気がする。トルタル側からの方が登山期間は短かくて済みそうだ。

6,830 m峰は左岸からのルートで十分登頂は可能であるが、右岸に比べて左岸の方が雪崩の危険は大きい。どちらの山もパールから3~4日でベースキャンプを建設できる位置にある。

(注) バリョウダロクシュ氷河およびサンヨーダロクシュ氷河の名称は、ククアイ氷河との合流点にパールの住民が同名で呼んでいる緑地があり、その名をとって便宜上つけた。したがって地元の人にも通じる名称だと思う。



VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM ④

2人で北アルプスへ出かけるように、夏は本場アルプスで乾いた花崗岩や氷壁を攀り、秋はその足でシャモニー谷の峻峰群を彷彿させるようなブラマーI峰へ立ち向うと云う……



北村清和氏



橋本康弘氏

東京徒歩山溪会 ブラマーI峰登山隊

出席者 北村清和 橋本康弘

聞き手 尾形好雄

ラトックの悔恨

—— ヨーロッパ・アルプスからブラマーI峰へ二人で出かけられるそうですが、その辺のところからお聞きしたいですね。

橋本 ほんとはインドからヨーロッパだったんですよ。最初の予定ではドナナグリへ行ってからヨーロッパへ行って、その後あわよくばヨセミテになんて考えてましたが、ゴタゴタしているうちにパーになってしまった。

—— 許可が取れなかったんですか。

橋本 いや許可は取れましたが、メンバーが決まらなくて、結局時期が早かったためにタイム・リミットになってしまったんです。

北村 今回も本来はもう2人いたんですが、内部事情があって2人になってしまったんです。

僕達が今回計画したインドは、僕がどこか行きたいと思って山を探して、メンバーの技術等を考えてブラマーがいいんじゃないかと思ったんですが、まあ、なんていうか、これから始めるんだけど前回の山登りが結局ラトックⅢ峰に行ったんですが、僕の山登りではなかったんで、今度は納得のいく山登りをしたいですね。

—— そうすると北村さんは、広島山の会だった

んですか。

北村 ええ、8年ぐらい在籍しておりました。現在もOBとして残ってますけどね。東京へはラトックの後で転動になってからですから、まだ2年ぐらいなんです。

まあ、山をはじめてからは結構長いんですが、高い山を感じるようになったのは28才の頃からで、それまでは岩登りばかりやってたんです。

—— カンピレ・デイオール頃は、まだヒマラヤに憧れてはいなかったんですか。

北村 あの頃は、ヨセミテに行きたかったですね。

—— そうしますと北村さんなんかは海谷の千丈に通ってた頃の人ということですか。

北村 そうです。僕はあの頃は余り冬山を登る気がなくて岩登りばかりやってたんですよ。

—— ほんとうに岩一辺倒の頃だったんですね。

北村 しかし、ヨセミテもいいけどラトックへ行って、あういう大きな山を観ると、やっぱりこっちの方が、いいんじゃないかと思って今回考えたわけです。

—— カラコルムへ行ってラトックのような岩登りをしてくるとまたカラコルムの岩峰群へ行きたくなくなるんじゃないですか。

北村 いいメンバーがいれば行きたいと思いませんがね。しかし、思っただけではやっぱり行けないし、また仲間と行っても絶対リーダーがいて、その下でその人のいう通りにしなくてはいけないと云うのも少しおかしいと思うんですね。やっぱり自分でルートを開かなければあういうところに行っても価値がないと思えますね。前回は、まあ技術的にも大分自分達は劣ってたんですけど、自分がやりたいことも出来なかったんです。

—— ラトックで満されなかった悶々としたものが今回の計画となった訳ですね。

北村 片や先輩だから余りいっちゃいけないと思うんですけど、やっぱりトップの公平さはあってしかるべきじゃないかと思ってね。何んでトップへ行かせてくれなかったのかと総括の中でもめっちゃってね。それで気まづくなって出てきたんです。

実際、ルート工作は3日間しかなくてね。JAC東海の人達がほとんど登っておって上部岩壁がちょっとあっただけで期待外れでしたね。結局あれだけの山へ行って何も出来なかったんです。

アルプスからヒマラヤへの継続

—— 東京徒歩山溪会は今何名位活動してるんですか。

橋本 何人ぐらいかな。メンバーとしては、名前だけなら30名以上はいるんじゃないのかな。

—— 昔、小泉さん達がアンデスへ行きましたよね。あれ以降会としてはどこかへ出かけているんですか。

橋本 3年前のマッキンレーぐらいかな。海外に出るというのは、海外旅行に出るくらいで山としてはあのはマッキンレーでした。もっともあれはうちの会としてではなくて同人としてですけどね。確かあれは全員4人とも会が違ったんじゃないかな。それでマッキンレー以後は毎年、一応外国のどこかの山には出かけるようになりましたけどね。

—— 橋本さんの海外登山の経験は？

橋本 1980年のヨーロッパだけです。マッキンレーの時は金が無くて行けなかったんです。その頃は、金がかけて離れてましたから諦めてましたけど、今ならなんとかなりますからね。

—— 今回は最初ヨーロッパから行くそうですが。

北村 一応高度順化をかねてと思ってます。

橋本 いや、順化っていったってただか、4,800mだよ。

北村 うん、だけどさ身体の慣れというのは物凄く違うと思うよ。ラトックの連中だって4,000mちょっとだったけど2週間位遊んだんだから。

橋本 順化のためでー。

北村 頭が痛いんだから。

橋本 だけど俺なんか通過しただけだけどモンブランに登ったときは何んでもなかったよ。

北村 いや、それは違うよ。やっぱりビバークしなければ駄目なんだよ。ちょっといなければ。

—— アルプスはどんな所を登るんですか。

北村 ヨーロッパは氷を登ってみたいんです。ヨーロッパで一番進んでいるのは氷壁技術だと思うんです。それを是非習らいたいですね。

橋本 俺は見てやるよ、氷は好きでないから。俺は乾いた岩を登りたいね。

北村 まあ、それは向へ行ってから相談しましょう。

2人でブラマー I 峰南東稜へ

—— ブラマーへの抱負を聞かせて下さいよ。

北村 初登したイギリス隊が5日で登れたという技術がどういふもんか聞いてみたいですね。まあ、世界の水準というのは日本とか離れてると思ってますんで、6,000mちょっとの山でもユニークな考え方をして登って、肌で感じてみたいと思ってます。

橋本 俺はこういふちゃんだけど、どこでも良いんです。兎に角、一度行ってみたいというもんだとまず味わってみたいと思うんです。もう一度出たいというのがありますからね。その時は自分の行きたい所に行きたいと思えますね。

—— ルートはどちらからですか。

北村 初登ルートです。

—— 初登ルートというと、ボニントン達の登った南東稜ですね。

北村 出来れば新しいルートを希望してもいいんですけど、なかなか……。パートナーが確実に登りたいというので。

橋本 いや、そんなつもりで云った覚えはないけど。

北村 だったら僕はバリエーションへ行きたいと思ってんだけど、あのブラマーワイフの方から行くとまだ未登なんだよね。しかし、僕はヒマラヤがよく解らないんでルートの見かたが僕には不足していると思うし、まだちょっとその辺が心配なんです。登れるものはどこでも登れると思ってんだけど、さあ一て、それが正しいルートになるかという自信がないんでね。

橋本 俺はあまりピークには固執しない。登りたいのは登りたいけれどそこまで無理して頂上に行かなければいけないというのはないと思えますね。最善をつくして登ればそれはそれで良いけど、それが無理だったらそれで余り自分を追いつめて考えることもないと思う。是が非でもピークに立たなければならぬという考えはない。

—— 2人ということでタクティクスは、アルパイン・スタイルで登るんですか。

北村 いや、僕はそういう考えは無く、テントを2つ持って行って中継キャンプを考えてます。一応、ルートの見通しがついたら一つずつ上げていくというやり方で、アルパイン・スタイルはまだ無理があると思えますね。

—— フィックス・ロープはどの位持参するのですか。

北村 ほんとは零でも構わないんだけど、やっぱり初めての山だから200m位持ってくつもりです。ようするに降りる時に疲れているから事故のないようにと思ってね。

—— 1980年のフランス隊の北東稜ではフィックスは8mしか使わなかったらしいじゃないですか。あとは懸垂を約30回かなんかで下ってますよね。

北村 登る時はいらないうんですよね。ただ下降の時にうまく下れるかということが不安だから、ある程度、前向きで歩ける所ならいいんだけど、アップザイレンになったりするとやはりフィックスはあった方がいいんじゃないかと思えますね。

—— 今度のキャラバンはキシュトワールからなんでしょうけど何日ぐらいかかるんですか。

北村 4日間位です。

—— ポーター数も少なくないですか。

北村 まだはっきりした数は出してません。

橋本 多くても5人位でしょう。

—— 隊荷輸送の方はどうするんですか。

北村 アナカンが若干ありますので一担、インドへ荷物をデポしてから、メインザイル2本とナツそれとテントぐらいを持ってヨーロッパに行くつもりです。

—— 話しを伺っているとほんとに羨しい限りです。なんてったって2人なんですから。

北村 僕思うに、これからは6,000mクラスは団体を組んでいかなかったって2人か3人でというのが重要な時代になるんじゃないかと思うんだ。

—— そうですね。北村さんところの寺西さん達のムラキラもそうでしたが、1979年にクンへ2人で行った山崎(祐)さんなんか、そろそろヒマラヤ登山も、北アルプスへ行くようなつもりで行われてもいい時代ではないだろうかといってますよね。特にインドはアプローチの交通便が良いのでこれからもどんどんスマートな登山が盛んになるんじゃないですかね。

北村 遠征そのものの内容が変ってきていると思うんですね。漠然とヒマラヤへ行く時は団体組んで皆んなで行けば安あがり、なんていうんじゃないくて、こういう時代なんだから遠征の本質をもっと考えるべきじゃないですか。

—— そうですね。少人数になればなるほど登山本来の個人の質が問われますからね。

北村 山登りの世界では肉体的トレーニングをどのくらいやれば、どのくらいの山登りが出来るといったものがよく確立されてないからね。この間、禿さんが登られた8,000mのダウラギリのようにトレーニングを重さねて自分の血圧がいくらかで心拍数がいくらかぐらいになると、このぐらいの山は誰でも登れますよといったものが確立されてもいい時代にきていると思うんですがね。ヨーロッパじゃ大分前になされていると聞いてますが、日本では、まだこういうのはクラブ単位ではなされていても全国的組織に於いてはなされてませんので知らしめていく時代ではないでしょうか。

—— ほんとうに今日はありがとうございました。是非頑張ってきて下さい。くれぐれもヨーロッパではひっかからないようにして下さいよ。朗報をお待ちしております。



紀行文について

水野 勉

今号では「キングドン・ワード(5)」を書く予定であったが、調査がまとまらないので(いいわけをさせてもらえば、少し忙しかったのである——といっても自分の怠け心をさらけ出すだけかもしれない)、日頃考えていることをいささか述べさせてもらう。こんなわがままを許してもらえるのも閑話なるが故である。

5月号(No.126)を見ると、「ヒマラヤ登山実践研究会」なるものが発足するそうである。たいへんいいことだと思う。もっと早くこういう会が日本ヒマラヤ協会の中にできるべきだったと思う。なぜなら、当協会を推進していくうえで、今のままでいけば、登山中心、しかも高峰の困難な登攀中心になってしまう恐れがあるからだ。かつては日本ヒマラヤ山岳協会であったが、それが日本ヒマラヤ協会へと名称が変わったとき、登山中心の活動からもっと広い分野の活動、さまざまな文化活動へと移るはずであった。しかし、今ふりかえてみると、名称から「山岳」がなくなってからなおのこと登山中心の旗色が明確になってきたといえるであろう。これは会の運営が主として登攀をめざす人びとによってなされていることから当然であろうし、エネルギーを集中的に注ぎこめる対象が未踏の高峰の登頂ということになれば、また当然といえるであろう。

この傾向は今後もつづくであろうから、今度の「ヒマラヤ登山実践研究会」なるものが発足して、あくまでも日本ヒマラヤ協会の活動の一部として登山を考えるようになればたいへんいいと思う。そして、当然会が単なる「山岳会」に終ることのないようにしたいものだ。今のままでいけば、殊更、日本ヒマラヤ協会が存在しなくてもいいよう

な感じがする。ヒマラヤの高峰の登攀は他の団体でもおこなっていて、当協会の独自性は全くないからである。敢えて独自性があるとすれば、ヒマラヤの高峰だけを対象として、他の地域の高峰には目もくれないということだが、それなら、むしろ「ヒマラヤ登攀クラブ」とでもすべきものであろう。

多くのジレンマはあると思う。前述したように、ヒマラヤ地域を対象とする団体といっても、ヒマラヤの大部分が山岳地域であり、しかも、ヒマラヤという言葉の口にするときには、あの白く輝やく高峰群が思い浮ぶのが普通である。ヒマラヤにあこがれる人びとが登山者であるということも事実である。しかし、「ヒマラヤン・クラブ」がその創立の当時から登攀のみを目的とはしていないで、広くヒマラヤのあらゆる面の研究調査をめざしていたことを考えても、「ヒマラヤ協会」もまたそうすべきであろう。

登攀が一つの美意識をもっているとするならば、トレッキングもまた一つの美意識をもっているであろう。けっして文化的に低い次元にあるものではない。ヒマラヤの町や村での生活にふれることもまた、異文化とのふれ合いを通じて知的な刺激をうけることであろう。また何を研究するわけでもなく、調査するわけでもなく、山々の間に日々をすごすのも、美意識が強く働いているともいえるよう。

だから、今度の登山実践を目的とするグループが当協会内にできると同時に、さまざまな目的を持つグループができることが望ましい。かつて、こういうグループができて、さまざまな面に発展すべき芽がみられたが、いつのまにか影をうすくしてしまった。このことについては、ぼく自身も

いささか責任がある。登山のみのグループが力を得ているのも、むしろ、他の面の活動を怠けた会員こそが責められるべきであるかもしれない。しかし、登山とちがって他の活動は対象がはっきりしないだけにとっても困難である。それはいままででも身に沁みて多くの人びとが感じていると思う。困難だからといってさけて通っては少しも解決にならない。運営する側と活動する側とで、登山に向けられるエネルギーの半分くらいは使って、切りひらいていかねばならないと思う。

それらとは少しちがうことだが、楽しさという人生の生活にとって必要なことも無視できない。登攀とか研究とかいう、エネルギーをかなり必要とするものばかりでなく、人間の生活にはリラックスもまた欠くことができない。ヒマラヤの楽しさを味わうということも、当協会にとってはたいへん重要なことだろうと思う。登山者にとっては苦しみもまた楽しみかもしれないが、休養という意味での楽しみもけって無視できない。緊張のみで人間は長い一生を貫きとおすことができないのだ。

日本ヒマラヤ協会が文字どおり、山岳協会から協会へと広い分野へと脱皮するには、なかなか困難な道が前に伸びていると思う。まして、現在のように登山中心に活動して、しかも軌道に乗っているときにはなお更であろう。容易な方法とすれば、むしろ協会から山岳協会、更には登山協会へとたどることであろう。実質的には今のままでよいのだから容易であろうと思う。底辺を拓けていてその頂点にヒマラヤ高峰の登山ということをめざした結果、現在のような状況になったと思うが、頂点に高峰登山を置く以上、最終目的ということだから、やはり登攀クラブという以外には考えられない。

紀行文について書くつもりが、いつのまにか当協会の在り方、方向ということに筆がすべてしまった。というより、はじめは枕のつもりで少しふれ、それから紀行文についてという段取りであった。しかし、思うようにいかないのは人の世の常である。羊頭狗肉といった状況だが、かんべんしていただきたい。

さて、以上長々と述べたことといささか関係あることだが、登山者が山に登るという行動のみを楽しみとして、しかもそれにのみ価値をみつけるというのは、まことに個人的な趣味であって社会的な面を持たない。未踏の困難な山に登ること自身が社会的に意味を持つ場合があるが、そういうケースはごく初期の探検時代にのみあるような気がする。現在でも、8,000メートル峰を困難なルートから無酸素で、しかも単独で登るということが社会的価値を持つ場合があるが、それでさえそろそろ古いという時期である。山岳部内部ではまだまだ未踏の山もあるし、未知の地域もあるが、社会的に知的な刺激を与えるものではないだろう。

山へ行かない人びとに山の楽しさを伝える、また旅行したい人にその旅行の楽しさを伝えることは、行動のみで自己満足しているよりは、ずっと社会的に大切なことである。ガイドブックも有用であるが、その山ないし旅行で筆者がどう感じたを伝えるのはより大切である。古い旅行や航海の紀行が今でも珍重されるのは、その記録性も去ることながら、筆者のペンの力によることが多いと思う。

紀行文は読む人に新しいものをもたらすばかりでなく書き手にも新しいことを教える。文章を書くというのは、ある論理をつうじて物事を整理することであって、会話とはちがう。会話のおもしろさもあるが、なんといっても書くということは整理をとまなうから、それは書き手にも多くのことを教えるはずである。頭の中でもやもやしていることをはっきりさせてくれもする。もっとも何も感じなかったり、観察しなかったりしたのでは、整理する材料もないであろうから、まずよく見聞きすることが第一である。それには柔軟な感受性と教養とが前提になる。見聞きするというのも、それほど単純ではないのである。

いずれにしろ、他人に自分の思いを伝えるのは社会的行動であって、紀行文は自分のためではない。しかし、それによって自分自身が教えられることが多いというのも事実である。

中国・天山山脈 処女峰 ボゴダ

ボゴダ 京都山岳会博格达登山隊

八ヶ岳で雪崩遭難があり12名もの登山者が亡くなった。沢筋ではあるが普段は本当に安心して登れるところであり、その時の雪崩の規模も小さいものであったという。

理論的には斜面に雪があれば雪崩があると思わねばならないらしいが、そんなことを云っていれば冬や春の雪のある日本の山や、1年中雪や氷におおわれているアルプスやヒマラヤなどは全く登れなくなってしまう。そこは登山者の経験やカンでルートを選んだり、雪の状態を判断して登ってきたのである。

そのデンでいけば氷河の中には必ずクレバスがある。それでは氷河のルートはとれなくなる。ヒマラヤ登山などがもっとも難しくなってしまう。そのために登山者はその登歩行の際にアンザイレンするなどの技術を学び、対処をして来たのである。それが登山の進歩であった。

しかしついつい面倒なことはしたくないし、慣れてくればイヤなんとか大丈夫だろう、という甘い判断を下したくなるのが人間の常である。下界で、あるいは結果としてあすればよい、こうすれば安全であるという話がたくさんあるが、実際に登り始めるとそれらの殆んどがやられていないのが実情ではなからうか？

今回の事故と反省は基本的なことを忘れたために事故が発生し、事故には必ず原因がありそれに不運が付きまとうという、その全く典型的なものである。まさかと思うような安全な(?)ところでの事故である。しかもその氷河上では最大のクレバスであり、その中は80cmであったという。

そこに落ちた白水さんは約4時間も狭いクレバスにはさまれて生き続けていたという。そして必死に救出活動をする隊員に対し「〇〇さんー、奥さんも子供もいるからー、あぶないからあー、もういいよおー。」と叫ぶように云い、声が聞こえなくなっていったという。何とも壮絶な死であり、読む側に言葉もない。冥福を祈るだけである。

中国登山の解禁以来、世界中から大変な数の

登山隊が彼の地を訪れている。登山をする者にとって、「西域」や「シ」(シルクロード)などと聞くと尻の下がムズムズし始め、居ても立ってもいられない。中国はやはり垂涎的であろう。

この本の写真はカラーを多く使っているために、その「西域らしさ」がよく伝って来る。ゴビの砂漠に行く列車や馬にのった牧童と羊の群れ、カラフルな衣裳を身につけて踊るウィグル族の娘。「トルファン」や「ハミ」のうりなど、もうよだれが出てくる程である。

特にうらやましいのは立派な列車に乗っての4,000 km 近い旅である。飛行機というものにあまり乗れなかった頃はいざ知らず、日本国内ですら飛行機を駆って飛び回るご時勢である。私鉄を停年退職されたばかりの中井隊長はさすがに列車の中でのこと、車窓からのことに触れられ、楽しい。確かに厳しい自然環境であろうし、生活する人々にとっては大変であろうが、我々にとってはそれらの場所が憧れそのものであり、往時を偲ばせてくれる。

そして「天山」の「崑崙」のと聞かされてはもうどうしようもない。この天山山脈の1峰「ボゴダ」峰。創立以来60周年を迎えるという長い歴史を有する社会人山岳会である京都山岳会がその記念にと企てた計画である。

遠藤京子登攀隊長は今までの経験から「次は低くても未登峰を選びたいと心に決めていた」と云う。これ程の山岳会でもいざとなれば休暇の問題、登山時期の問題、参加費用の問題で参加を断念した隊員が出る。もちろん正職につきまじめに社会的責任を果している人々にとってははたかが登山のために就・退職するなど考えられないであろう。評者の回りの、人生を捨てて突っ切って山登りをしている多くの連中とはどうも一緒に考えにくいようである。

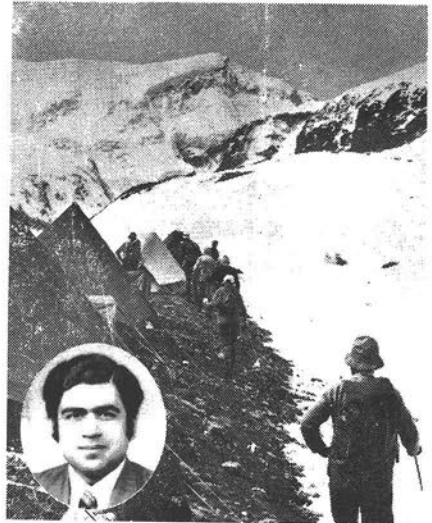
ともかくこうしてボゴダは初登頂された。残念ながら前記の白水さんの事故が2次登頂後に起ってしまったことは大変残念なことである。(ぎ)

Shikhar Travels

— シカール・トラベル —

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール.....
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。

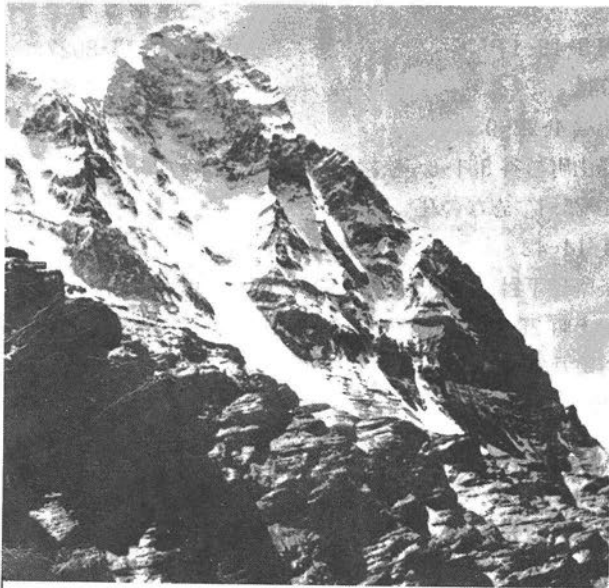


CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,
26 barakhamba road new delhi-110001
tel. 42555, 42666 telex 031 4364 SHIK IN Cable SHIKHE
Branch office: Gangtok
Camp office: Joshimath & Uttarkashi



ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

- ★ インド政府許可証
- ★ 通関手続
- ★ 交通機関
- ★ ポーター
- ★ ハイポーター
- ★ デラックス食料賄い
- ★ テント宿泊用具
- ★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.

F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India

Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823

日本代表

ファー イースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル

☎407-8100 (代表)

■ 寸 感 ■

難産だったブリクティ登山隊も漸く出発の運びとなりました。そろそろ春の登山隊の成果が聞かれる頃になっての出発ですが、今頃は、ミールを従えてカリ・ガンダキのキャラバンを満喫していることでしょう。禁断の地の山・ブリクティの報告が今から楽しみです。

「ヒマラヤの雪崩」特集のさ中、また悲しい知らせがアンナプルナⅢから届きました。 (O)

事 務 局 日 誌 (4月)

- 1日(木) 阿部家本葬(於：大分竹田、山森、片岡)
 3日(土) ブリクティ隊顔合わせ会(稲田、山森、佐久間、土谷、三笠、遠藤、浅見、高橋)
 4日(日)～5日(月) ブリクティ隊梱包

- 7日(水) ブリクティ隊先発隊出発(土谷)
 16日(金) ブリクティ壮行会(於：赤坂)
 17日(土) ブリクティ隊本隊出発
 事務局打合わせ(稲田、山森)
 18日(日) '82年クン登山学校集会
 23日(金) 車両競技公益資金記念財団監査
 26日(月) 東京ヒマラヤ集会

ヒマラヤ No.127 (6月号)

昭和57年5月10日印刷 57年6月1日発行
 発行人 柴田 金之助
 編集人 尾形 好雄
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
 淀橋食糧ビル506号

< 新 入 会 員 > 昭和57年2月20日～57年4月16日

会員番号	氏 名	〒	住 所	電話番号
1579	国 沢 鎮 雄			
1580	清 岡 謙 一			
1581	天 城 敞 彦			
1582	田 中 誠 司			
1583	安 部 誠			
1584	遠 藤 容 弘			
1585	阿 部 恭 浩			
1586	津 田 元			
1587	小野寺 光 義			
1588	麻 田 正 博			
1589	森 光 一 仙			
1590	平 野 晋 二			
1591	山 崎 泰 人			
1592	宮 坂 憲 一			
1593	真行寺 栄 一			
1594	伊 藤 博 紀			
1595	井 塚 真 樹			
1596	小 川 智			
1597	福 田 靖			
1598	後 藤 裕			

1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌン (7,135 m)

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるバック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとりた確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行っており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実施している人は9名に達し、その中には8,000 m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

- 1977年 タルコット (6,099m)
(JACに協賛して行なった)
- 1978年 ヌン (7,135m) 4名登頂
トリスルI峰 (7,120m) 6名登頂
II峰 (6,690m) 7名登頂
- 1979年 キャシードラル (6,400m) 6,000 mまで

- 1980年 ケダルナート・ドーム (6,831m)
19名登頂
- 1981年 ナンダ・カート (6,611m) 事故のため断念
- 1982年 クン (7,077m) 現在準備活動中

実施要項

- 目的** ①ヌン (7,135m) 登頂
②高所登山の基礎修得
- 時期** 1983年7月末～8月末 (35日間)
- 負担金** 71万円 (航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員** 20名
インストラクター4名 (医師含む)
- 申込み** 1982年6月末までに下記宛に申込みこと (資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号 日本ヒマラヤ協会

★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、関西遊旅行が担当します。一般旅行業607号

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より応募したものを、毎月一作づつ掲載する予定でおります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

《規定》

- (1) モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2) 被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。
- (3) 未発表であること。

- (4) なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見られるような写真 (例：カラパタからのエベレスト) などは御遠慮下さい。

《送り先》

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号
HAJ「ヒマラヤ」編集部

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

至中野	至池袋	ICI山用品本店	至池袋
至中野	至池袋	ICIテニス用品	至池袋
至中野	至池袋	ICIスキー用品 本屋 大久保通り	至若松町
至中野	至池袋	ICIサッカー・野球用品	至新宿

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219